

馬入峠の^{ようさい}要砦とその背景

広長秀典・小暮伸之・佐藤 啓

1 はじめに

福島県文化財センター白河館（まほろん）では、平成30年に戊辰戦争後150周年を迎えるにあたり、コーナー展示「戊辰戦争と考古学」（会期：平成29年12月16日～平成30年3月4日）と文化財講演会「戊辰戦争期の陣地遺構」（平成29年12月17日）を開催した。

本稿は、上記文化財講演会における広長の講演「馬入峠の稜堡式関門型防塁とその背景」^(註1)の内容を基本とし、小暮・佐藤の知見を加えて報告するものである。

2 戊辰戦争期の陣地遺構について

福島県内における戊辰戦争期の陣地遺構については、近年、事例集成が行われ始めている^(註2)。それらの詳細について、ここで論及することは避けるが、いずれも遺跡の発掘調査や縄張り調査、文献資料の解釈等を通じて、当該期の遺構を論述している点に特徴がある。

平成29年12月17日の文化財講演会において、小暮は、現在の福島県域を中心とした戊辰戦争の経過、戦い方の特徴（時代背景・銃砲類の性能・近代的な戦争への転換）、戊辰戦争期の陣地遺構の縄張り調査や発掘調査事例の解説、陣地遺構関連史料（古文書・絵図）の解説を行った^(註3)。この中で、戊辰戦争期の陣地遺構については、以下の4種類の分類を行った。

〔Ⅰ〕大砲等を運搬することが可能で、軍隊の移動にも便利な街道沿いの要所で、かつ戦う上で有利な高所に、単独あるいは複数で構築された事例（二本松市大壇口古戦場跡、宮城県丸森町旗巻峠古戦場跡、新地町向田D遺跡、新地町武井D遺跡、会津若松市戸ノ口原古戦場跡）。

〔Ⅱ〕街道沿いの要所を守るという軍事地理学上の観点を踏まえると、立地条件は中世の城館跡と一致するため、既存の城館跡をそのまま、或いは若干手を加えて再利用した事例（桑折町西山城跡、浅川町浅川城跡、平田村蓬田館跡）。

〔Ⅲ〕防御のための土塁、空堀をライン状に築造しているに過ぎないが、兵士の駐屯地等としての陣地的な機能を有したもので、中世城館のように、独立した中心的エリアと、それを守る堀跡等をもたない事例（平田村中根館跡、相馬市内沢遺跡）。

〔Ⅳ〕峠道の頂部に土塁と空堀からなる防御施設を持ち、麓へ向かう斜面の峠道の脇に塹壕や砲台場を設ける長城的な事例（天栄村・郡山市馬入峠堡塁跡、猪苗代町母成土塁跡）^(註4)。

一方、近年において、九州地方・近畿地方を中心に、事例が蓄積されつつある幕末期～明治期の稜堡式築城等を対象とした書籍の刊行や^(註5)、シンポジウム^(註6)が行われている。特に後者のシンポジウムの中では、戊辰戦争期の陣地遺構は、資料の少なさもあって、研究者が少なく、研究自体もあまり進んでいない状況が報告された。当シンポジウムでは、①神奈川台場（神奈川県）、戸切地陣屋（北海道）、楠葉台場^{くずは}（大阪府）等を例に、幕末期の稜堡式築城は、欧米の「稜堡式築城の教科書」の理解度が低い、「誤った西洋城郭」であるという否定的な解

積をする立場（註6：山本報告・藤井報告）と、②欧米の稜堡式築城が日本ナイズされた形態と解釈する立場（註6：高橋報告・中西報告）が示された。両者の主張は、相反するものであるが、本稿では、政治的背景や社会状況、地形等に応じて、城郭に採用される要素が異なると捉える上記②の立場を参考に、分析を試みる。

3 馬入峠堡壘跡—遺構の構造—

馬入峠堡壘跡とは、天栄村教育委員会により登録されている埋蔵文化財包蔵地の名称である。遺構は、天栄村と郡山市湖南町の境に位置する馬入峠を塞ぐような形で残存している。図1で所在地を詳しく見ると、天栄村の大平集落から赤石川に沿って、県道235号を約6km北上した、標高850～900mの高所に、遺跡は立地している。この峠道は馬入峠を越えて会津側に入ると郡山市湖南町福良に至り、その途中には、延喜式内社の隠津島神社（養蚕と農耕の守り神）、会津藩馬入口留番所跡（福良口留番所跡）がある。近世には東方に6km離れた勢至堂峠に次ぐ重要な道として、白河と会津盆地を最短距離で結んでいた。馬入峠は、会津藩の廻米の主要道の一つであり、大平集落を経由することから「大平口」と呼称されている（註7）。

馬入峠堡壘跡は、その重要な峠道の頂部に築かれている。図2で遺構の全体を俯瞰すると、平面形は完全な「星稜型」ではないが、この範疇に十分収まる稜堡式で、南東方向（白河側）を向いていることから、東軍によって造られたと考えられる。峠頂部のなだらかな部分に構築されており、東端は尾根に接続しているが、西端は途中で完結し、尾根の急斜面とは約30m離れている。

次に、遺構を詳細に見ていく。全長227mの土塁と空堀からなる陣地遺構は、定規で引かれたように直線的に築かれ、その中央は県道235号線が貫通して壊されているが、内枘形状の遺構の一部（図2のa）が現存している。この内枘形状の遺構は、一度に大勢に攻め込まれないように通路が鍵型に曲がっているため、城郭的な機能を持っていたと推測される（註8）。この中央部から東側と西側には、直線的な空堀と土塁から成る陣地遺構が築かれ、特に西側は西洋の稜堡式城郭にみられる「フランク（図2のb）」「フェイス（図2のc）」（註9）と呼ばれる折れを伴っている。西側の空堀は、堀底の幅が約3mで、堀の内側（会津側）には土塁が築かれている。堀底から土塁上面までの高さは平均で約3m、土塁上面の幅は約1m、遺構の平均則長は2.6～5.18mを測る。陣地遺構の外側（白河側）の法面は、平均43°傾斜しているが、これは、敵の銃砲弾が着弾した際の運動エネルギーを分散させ、跳弾させることにより、防御力を高める造りとなっている（註10）。空堀の外側（白河側）は、わずかな高さの土塁が盛られた箇所がある。図2のd・eと表記した部分には、大砲を設置したと思われる窪みが認められ、図2-eと表記した部分には、前方の視界を遮らないように、前面の土塁は少し低くなっている。ここからは峠道をよく見下ろすことができ、会津側に侵攻する敵を狙い撃ちできるようになっている。南西側の突出部（図2のf）は、広い平坦地となっていて、兵士を駐屯させるための陣小屋が建てられていた可能性がある。また、内枘形状の遺構（図2のa）の東側の陣地遺構は、簡略化・省略化され、稜堡式築城に手慣れた者が設計と構築を指示したことが窺える。

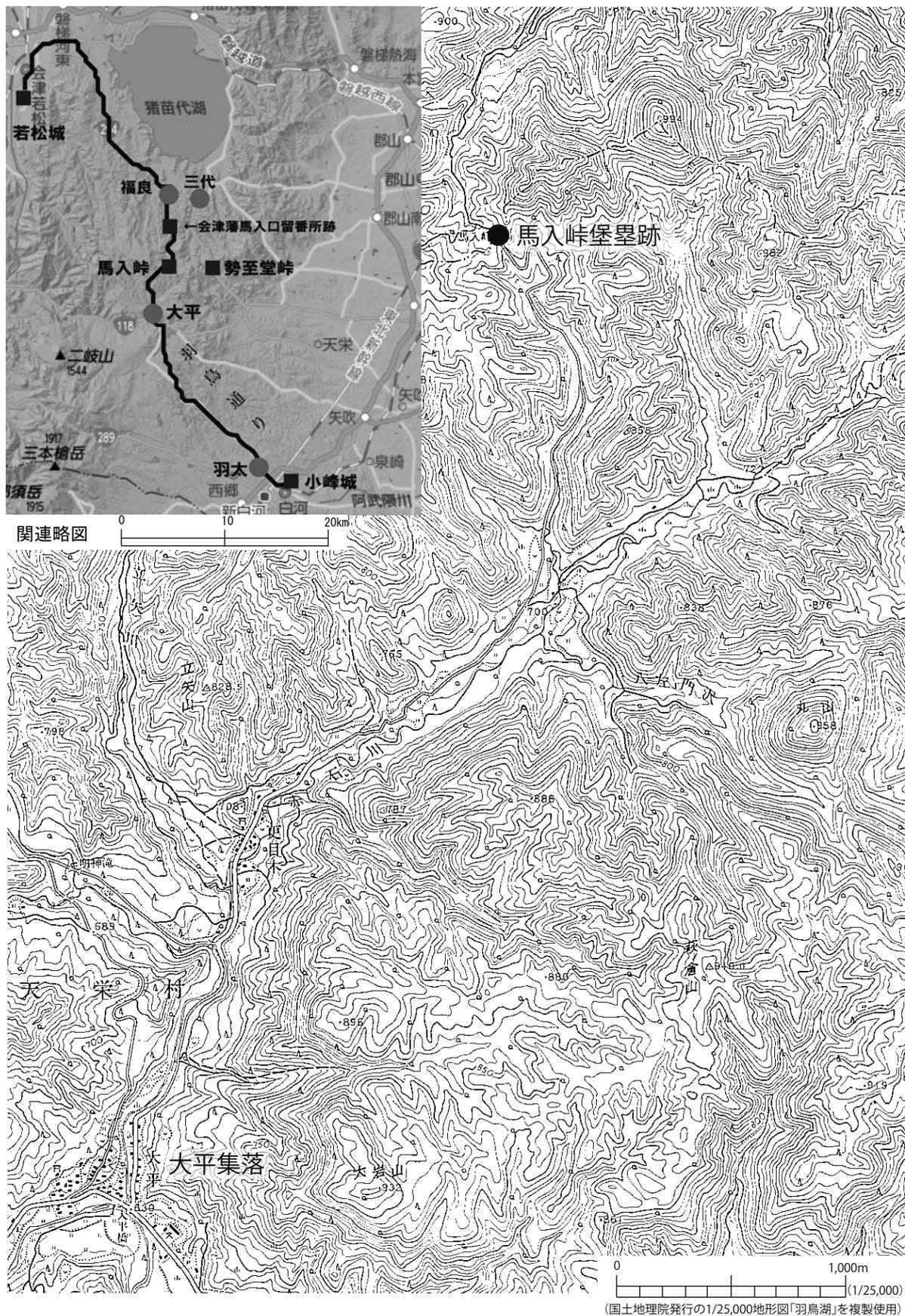


図1 馬入峠堡壘跡の位置図

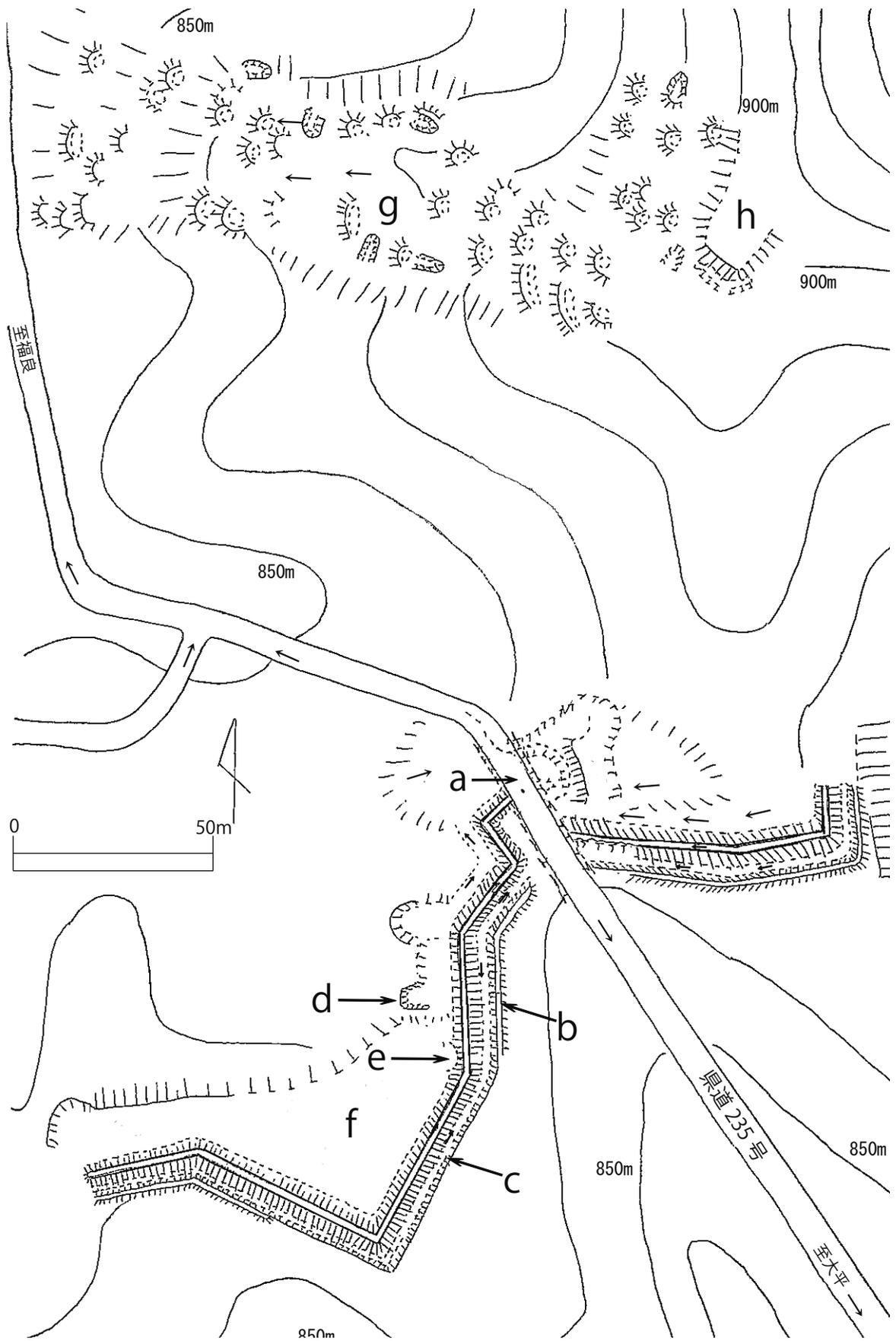
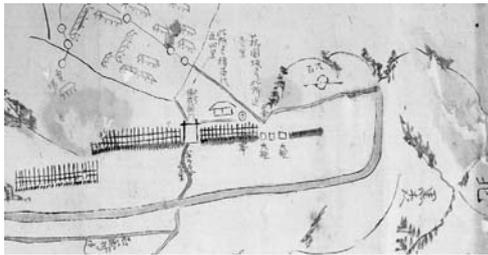
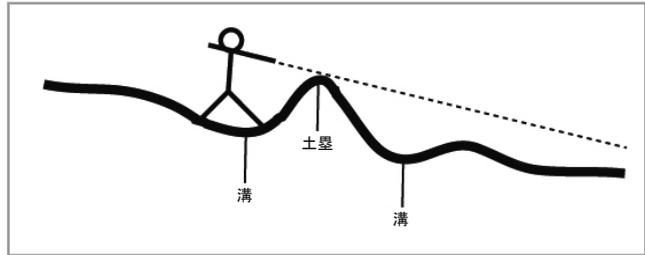


図2 馬入峠堡壘跡縄張図 (広長原図)



「母成峠布陣図（部分）」（個人蔵）（福島県立博物館寄託）



母成土塁跡の塹壕概念図

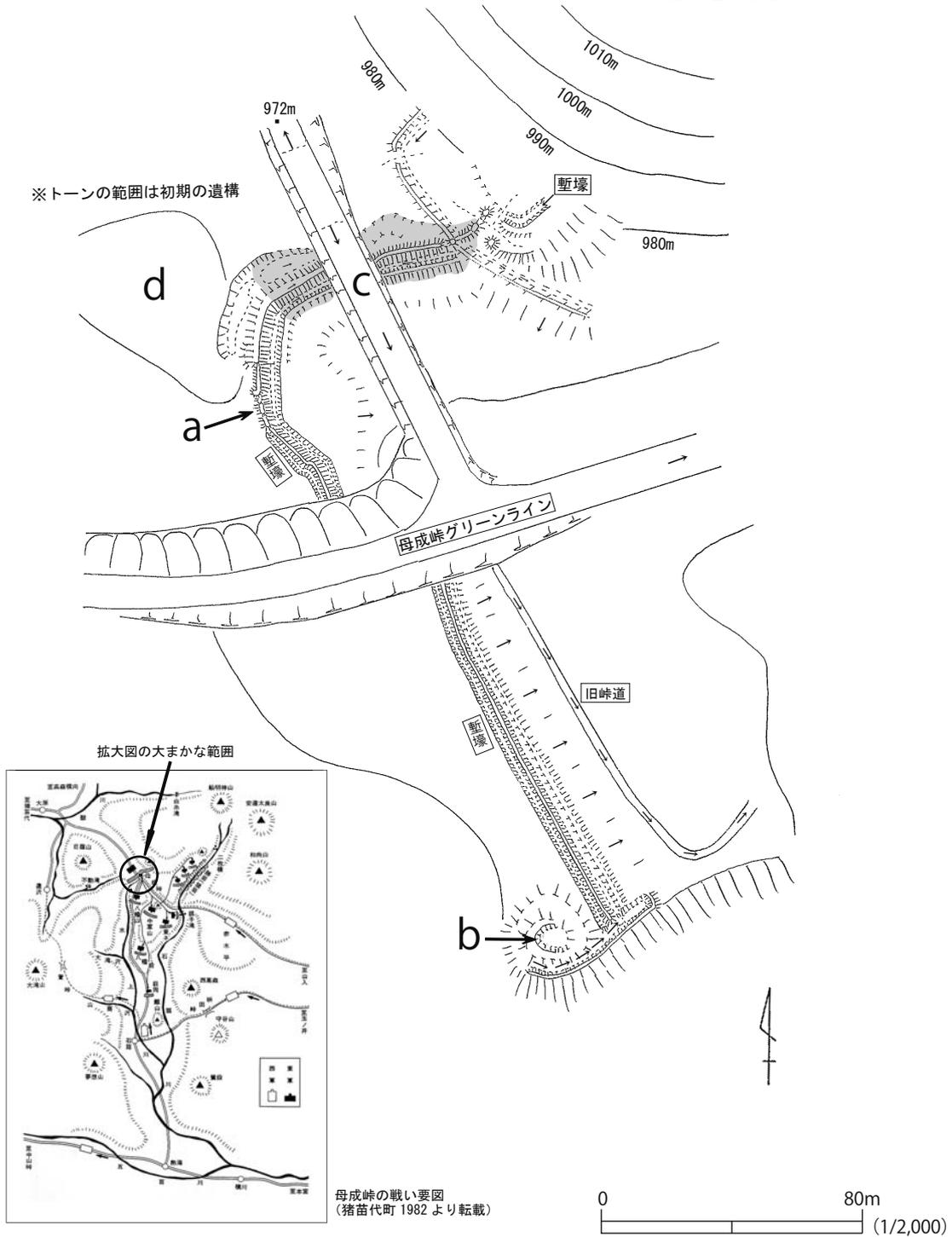


図3 母成峠土塁縄張図（広長原図）

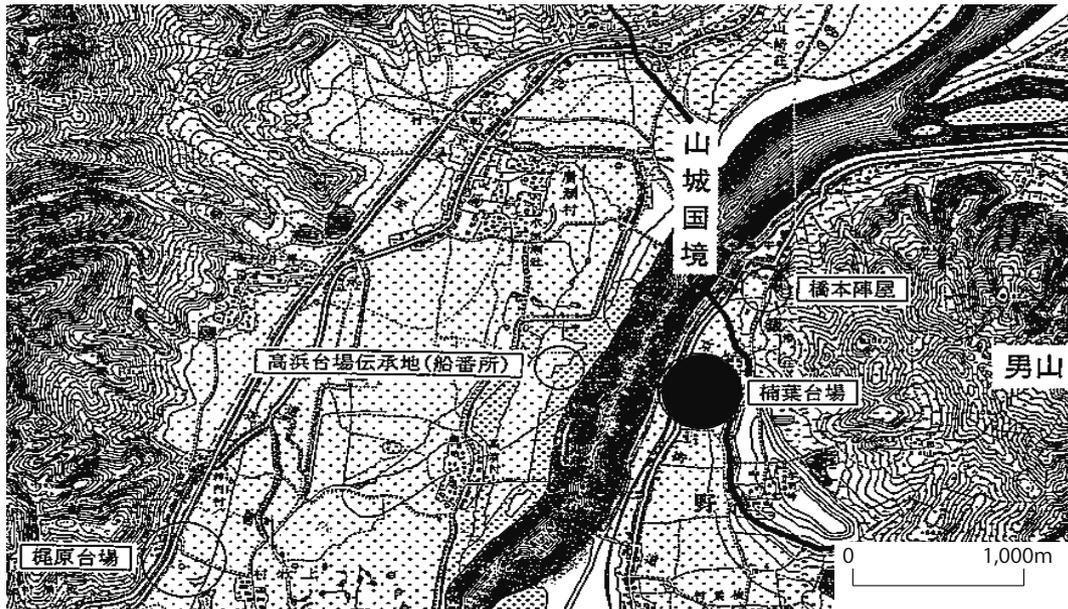
峠道の片側にだけ塹壕や大砲を設置した箇所を造るという特徴は、稜堡式の陣地遺構ではないが、猪苗代町の母成土塁跡（図3）^(註11)にも見受けられる。母成土塁跡は、本宮村の薬種商・糠沢直之允の手記「閑窓私記」^(註12)によれば、慶応4（1868）年3月頃に築造が始まる。遺構は、全長約100m、高さ3.5～4mの土塁が、峠の頂部を取り囲むように馬蹄形に造られ、その前は空堀になっている。この遺構に接して、塹壕（図3右上の概念図参照）が旧峠道を見下ろすように、南東方向（石筵側）に延びている。塹壕西側の溝の底面と土塁の上面の比高差は約1.2mを測る。塹壕には、図3のaに土塁の切れ目、同図のbに高台があり、大砲を設置した可能性がある。特にbの高台は、旧峠道が北東方向に曲がる地点に造られていて、ここから北東側に曲がって下る斜面に睨みを利かせている。図3左上の「母成峠布陣図（部分）」は、年代が記載されていないものの、描かれている事物から、慶応4（1868）年の母成峠の戦いに関連する資料と推定されている^(註13)。掲載した部分は、現在の母成土塁跡の様子を描いたもので、峠道を見下ろすような塹壕の表現がないため、初期の陣地遺構の姿を描いた史料と思われる。2段の土塁の上には柵列が並び、上段の土塁のほぼ中央には関門らしき表記が認められ、図3のcと推定される。また、史料の左奥の平坦地には、図3のdに陣小屋と思われる建物群が存在したことを示唆している。このように、当初は峠の頂部のみに防塁を設けたが、西軍が来襲する8月21日までの間に順次、塹壕を拡張したと考えられる。注目すべきは、旧峠道と塹壕の間に、約20mの間隔があることで、峠道から攻め上る敵を、この距離を生かして撃ちすくめ、侵攻の勢いを削いだ隙に、塹壕側から反撃できるようになっている点である。

馬入峠堡壘跡は、稜堡式という特殊な形状や峠道頂部という立地から、単なる口留番所のような関門ではなく、後述するとおり、大鳥圭介が認識していた「要砦」として築造されたと考えられる。慶応4（1868）年5月中頃には大体完成し、同年8月23日頃には、若松城下に西軍が進攻したことにより、撤退したと推定される。ここで実戦が行われたという記録はない。

なお、馬入峠堡壘跡の北東約50m離れた尾根の西向き斜面（図2のg）には、タコ壺状の窪地が連続し、その上に平場（図2のh）が造られている。前者は福良（会津側）へ向かって下る峠道を狙う高所に造られ、後者は大砲を設置すれば、稜堡式の陣地遺構の主要部を攻撃できることから、西軍が占領時に造ったものと考えられる。西軍の戦陣記録^(註14)に、馬入峠の東方6kmに位置する勢至堂峠を占領後、大垣・長州藩兵から成る2小隊が守りを固めていたところ、東軍が抜け道を通って来襲してきて苦戦に陥ったが、最終的には薩摩・土佐藩兵の応援を得て、東軍を敗走させたという記述がある。馬入峠でも、東軍の反撃を受ける可能性を予測し、備えを固めたものと考えられる。

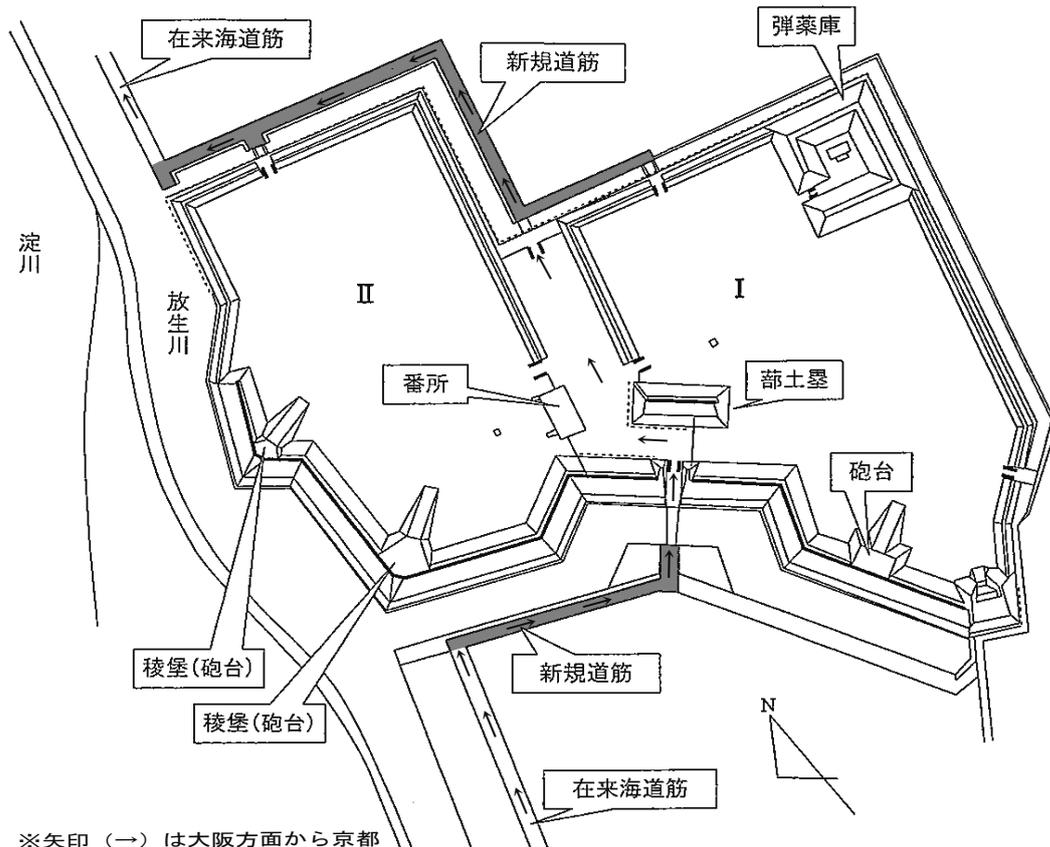
さて、この馬入峠堡壘跡は、慶長5（1600）年に、上杉氏が築城したとする説^(註15)があるが、これを実証する史料は皆無であり、むしろ、大阪府枚方市の楠葉台場、北海道函館市の四稜郭^{しりょうかく}の構造に類似することを重視するべきであろう^(註1・16・35)。

楠葉台場（図4）は、文久3（1863）年に朝廷が外国船対策として構想した淀川台場構想を受けた京都守護職時代の会津藩が幕府に建白し、大阪湾から京都に侵入する外国船に備えるという名目で、淀川左岸に築いた陣地遺構である。慶応元（1865）年に完成した。この陣地遺構



(1/20,000 仮製地形図をもとに作成)

(馬部隆弘 2008 より転載)



※矢印(→)は大阪方面から京都方面への台場内の通過経路。

※トーンの部分「新規道筋」。

(中西裕樹 2008 より転載)

図4 楠葉台場跡の位置と概念図

は、当時最新の稜堡式で、尊王攘夷派（主に長州藩士）の入京を阻止するという関門の機能も備えていた（註17）。設計の総責任者には勝海舟、実際の実務には広瀬元恭（註18）が当たった。当時の設計図「河州交野郡楠葉付関門絵図一分計」（京都府立京都学・歴史館蔵）によると、土塁と堀で囲まれた約30,000㎡の遺構内には、3基の砲台、番所、弾薬庫を備え、新しく造り替えられた京街道（新規道筋）が通っているのがわかる。平成19・20年度（2007・2008）の発掘調査では、遺構南側の入口で石垣の一部、遺構北側で土橋が確認され、日本で唯一残る河川台場の輪郭や規模が明らかにされた（註19）。現在は国指定の史跡となっている。

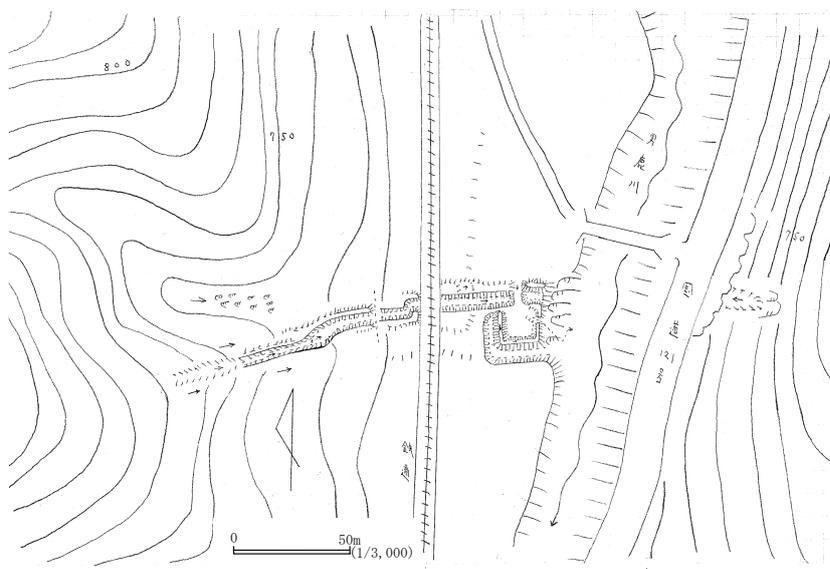
4 他遺構との対比

ここでは、馬入峠の遺構の構築年次を検討するため、県内外で「防塁」とされる近世初期以前の遺構との比較を行いたい。

（1）鶴ヶ渚城跡（栃木県日光市、図5）

男鹿川右岸に構築された防塁跡である。男鹿川際に虎口があり、ここから西方へ土塁と空堀が走り斜面部の堅堀へ続く。虎口の前面には角馬出が付随する。空堀はおおむね直線的で、一部で屈曲をもつが、鉄道建設によって攪乱された可能性もあり、遺構かどうか不明確である。土塁及び空堀の塁線は、虎口周辺では直線となる。堀跡の幅は最大約10m、土塁から堀底までの比高差は約5mあり、馬入峠の土塁と空堀より規模が大きい。この遺構は、馬出が存在する南側からの侵攻に備えたものであることが分かる。

鶴ヶ渚城跡は、慶長5（1600）年の書状群（註20）で確認される「靄渚山」に該当するとみられる。七月廿二日付大国実頼宛直江兼統書状には、実頼が鹿沼右衛門尉・栗林肥前守らに命じた「靄渚山」の普請を承認するとともに、「湯本たか花（湯本・高原峠に比定される）」の警備についても言及している。また七月廿八日付塩谷伯耆守・鹿沼右衛門尉・栗林肥前宛上杉景勝書状にも、「其元普請等皆々苦勞之段、感悦候」とその普請を労った後、「境目相替事候者、



注進尤候」と指示している。つまり「靄渚山」は、下野国との境目の防備にあたる要地であったことが理解され、鶴ヶ渚城跡の遺構はこの時構築（あるいは改修）されたと考えられる。

戊辰戦争時の改修について言及する意見もある（註21）が、現況では改修箇所を指摘することは困難である。

図5 鶴ヶ渚城跡（広長原図）

(2) 畑谷城跡 (山形県山辺町、図6)

慶長5年に上杉方の攻撃により落城したことで知られる、最上氏側の「境目の城」である。遺構は二重堀に囲まれ枡形虎口が設けられた主郭 (I) と、土塁と空堀に囲まれた空間 (II・III) からなり、特にII・IIIには幅10mを超える巨大な空堀が展開する。その規模は主郭部Iを大きく凌駕することから、IとII・IIIに時期差が指摘されている (註22)。このうちIIIは、部分的に二重堀を呈しながら旧道を引き込み、そして南北を土塁と堀で区画した虎口空間に誘導しており、松岡進氏はIIIを「関所的な形態」ととらえている (註23)。

畑谷城跡II・IIIの構築年代を特定するのは困難だが、天正18(1590)年から慶長5年の間でとらえることは可能であろう。

以上の「防塁」は、土塁と堀から構成され、おおむね直線的に進路を遮断する点で共通し、これに門や柵列、建物などの構築物から構成されていたと推定される (註24)。つまり、近世初期の「防塁」は道を遮断することを目的として、塁線が直線あるいは直角となるのが一般的で、鋭角や鈍角の塁線をもつ例はまれだったと考えられる。

一方、鶴ヶ渚城跡では虎口前面に馬出が、畑谷城跡では広い虎口空間が設けられていた。敵の侵入を防ぐ城郭施設が付随することから、これらの遺構が強い軍事的要求により造られたと推定される。また、居住性に乏しい峠に造られることから、臨時性が強い防塁と評価される。

軍事的要求が低下した江戸時代以降、防塁は、峠ではなく備えが立てられる麓の要地に造られるようになることで関門化したと考えられる。大きな土塁や空堀は必要とされず、簡素な柵列と平入りの虎口が設けられるようになって、会津藩では口留番所などに引き継がれたと推定される。近世以後の会津藩の絵図には、口留番所の姿がたびたび描かれ、江戸時代後期の所産である桧枝岐村絵図や叶津村絵図にも、幹道を遮断する柵列と平入りの冠木門が描かれている。これらの絵図は一次史料ではないにしても、番所の様相がうかがうことのできる資料といえる。この中で、柵列は直線的に道を塞いでおり、横矢状の折れをもつこともある。また、堀や土塁は描かれていないことから、構築されていなかったか小規模だった可能性が高い。

このように、馬入峠の陣地遺構と、近世初期の「防塁」や近世の「番所」とは、形状や規模が大きく異なる。

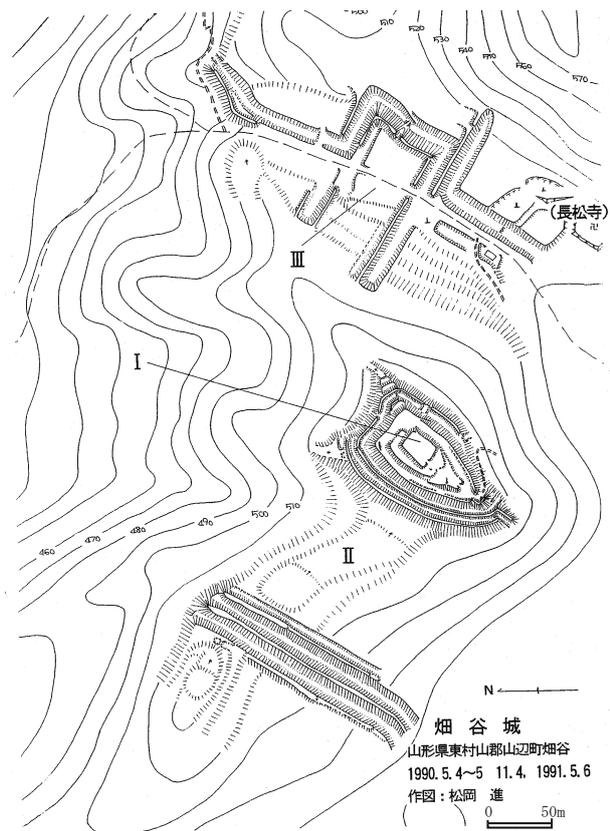


図6 畑谷城跡 (松岡 1991 より)

5 防塁の構築主体

大鳥圭介の回想記である『南柯紀行』^(註25)に、馬入峠の陣地遺構に関する推定される記載が確認される。大鳥は、幕府陸軍の歩兵奉行を務めた軍人で、西洋軍学に通じていた。戊辰戦争時は、旧幕府脱走兵を率い各地を転戦し、箱館政権（いわゆる「蝦夷共和国」）では陸軍奉行に任ぜられた人物である。

『愚按に我兵隊も初めは人数多かりしが、数度の戦にて多く士官兵卒を亡い、追々微勢となりたるゆえ新兵を募らざれば、大勲を建つる力なし、因りて会津に至り新規農兵を募る策を立てんとて、五月十五日頃山川大蔵と与に若松に赴きたり、留主中の事務は大川、沼間、山瀬、天野、武蔵、水島に托せり。（中略）

会津両君に謁し、種々の愚衷を建議し、板倉小笠原侯も日々登城ありて事務を謀らるる由なり、但し矢張因循姑息加之奥羽同盟の事成りしを以て、一体の人心大に弛緩せし形あり手建議せし件々も急には行われず大に失望せり。

余は七日町の旅亭に宿せり、工兵方吉沢勇四郎先頃より大平口に出て要砦を建築せしが、此頃若松へ帰来りし由にて、同亭に宿し白河の動静を聞き共に大息し事の危きを察せり。』

この記載によれば、新兵を募るため下野から若松に赴いた大鳥は、会津両君（松平容保と新藩主喜徳）^{のぶのり}に謁見し数々の提言を行ったようである。そして、若松城下七日町の宿舎で旧幕府軍工兵方の吉沢勇四郎と同宿し、白河方面の状況を聞いていた。

吉沢勇四郎は旧幕臣で、幕府陸軍工兵方の工兵頭並を務めた人物である。語学、特に英語に長けており、『斯氏築城典刑』（慶応元～2年）や『火功奏式』（慶応2年）を翻訳したことで知られ、幕府陸軍の中では最新の戦略と築城術を学んでいた。戊辰戦争時は、大鳥とともに旧幕府脱走軍として各地で戦い、箱館政権でも小菅辰之助とともに工兵頭並に任じられている。その後の経歴は不明だが、一般的には箱館戦争で投降したとされるが、戦死あるいは投降後に処刑されたとも伝わる^(註26)。

吉沢は、大鳥が若松に到着する5月中旬には要砦（要塞）を構築しており、『先頃より大平口に出て要砦を建築せし』という文言から、これ以前には取り掛かっていた可能性が高い。いうまでもなく、会津藩領で白河方面の状況を把握できる「大平口」は、馬入峠周辺を指す。

会津側の回想録である『会津戊辰戦史』^(註27)にも「大平口」がたびたび登場する。特に、『五月四日東軍更に戦略を議し、朱雀士中三番士中隊中隊頭上田八郎右衛門一中隊、小池帯刀土工兵百余人を率いて大平方面に陣し』た大平口は、西郷頼母を総督とする勢至堂口とは別の指揮系統下にある拠点であった。この記述により、会津藩内にも土工兵の存在が確認されるとともに、この頃には要砦建設が始まっている可能性が想定される^(註28)。一方、3月頃の状況を述べた部分では『大平口には原田対馬を総督とし、（中略）土工兵小池帯刀、（中略）新選組の一部及び旧幕府軍の歩兵百数十人此の方面に在り^(註29)』、大平口の警備に旧幕府脱走兵も関

わっていたという。しかし、旧幕府脱走兵及び新選組が会津に合流しえるのは早くても4月中旬以降であることから、上記の記述は4月以降の状況を記述していると推測される。この『旧幕府軍の歩兵』に吉沢が含まれ、5月前半には大鳥をして要塞と言わしめる遺構の構築を指揮していた可能性が高い。吉沢は大平口で、旧幕府工兵隊とともに、会津藩土工兵を指揮していたと推定される。

なお大鳥は、『南柯紀行』で、大平口の施設を「要砦」、石筵山（母成峠）のそれを「胸壁」と記載しており、両者を区別していた可能性がある。そうであるならば、大平口の施設は通常の堡壘や塹壕とは異なる施設であったと読み取ることもできる。

6 構築の背景

馬入峠は、郡山市湖南の福良地区と白河市を最短距離で結ぶ街道上に位置する。この道は、隠津島神社の存在などから古代・中世の幹道と推定され、中世末頃に公道としての位置を勢至堂峠にゆずるが民間では通行され続け、寛文4（1664）年には馬入口留番所の設置、正徳元（1711）年に会津廻米道の認定など、年月を経るにつれ重要性を増していったと伝わる^{（註30）}。戊辰戦争時の慶応4年5月から6月においても「大平口」から出陣した軍勢が、羽太村（西白河郡西郷村）に営陣し白河奪還を目論むなど、「勢至堂口」とともに重要な攻撃起点であった。

一方、馬入峠の重要性が、軍事的な要素のみに留まらないことが複数の文献からうかがえることから、そのいくつかを紹介する。

『会津戊辰戦史』は、藩主松平喜徳が5月27日に若松から出陣、同29日から6月9日まで福良に滞在し、6月10日に福良に隣接する三代へ移ったと述べる。松平喜徳は、水戸藩主徳川斉昭の子息、つまり十五代将軍徳川慶喜の弟にあたる人物である。松平容保の養子となり、容保の隠居に伴い家督を継いでいた。この時、喜徳は一ヶ月余り湖南地区に在陣し、白河口の戦いを督戦している。また、『旧夢会津白虎隊』^{（註31）}によれば、『我慶喜（喜徳）公、白川口ヲ統括セラルヽ為ニ出馬アリ。白虎一番、二番ノ両隊共ニ従軍ヲ命セラル。公、時ニ^{はじめ}甫テ十五、主従共ニ初陣』だった。喜徳は、演習や施設を視察するとともに各地に指示を出しており、新選組が福良に呼び出され喜徳に拝謁したのもこの時である^{（註32）}。

このように、馬入峠の要砦が築かれていたのは、初陣となる藩主松平喜徳が福良を訪れる直前の時期であった。このことからこの要砦は、藩主を直接守るために構築されたと考えるのが自然である。

7 まとめ

以上の検討により、馬入峠の陣地遺構は、戊辰戦争時に旧幕府脱走兵・吉沢勇四郎の指揮のもと会津藩土工兵により構築された稜堡式防塁と推定された。遺構が全周しない点や、幹道を取り込む内枳形を設けている点から、関門ととらえることもできる。しかし遺構は、一般的な関門が平入りの冠木門であるのが通例である（図3参照）のに対し、馬入峠の遺構は枳形虎口

が構築されている。稜堡式で構築された土塁・堀からなる区画施設と、伝統的な城の虎口である右折れの内柵形虎口のセットをもつことから判断すれば単なる関門ではなく、大鳥が認識していたように要砦として造られたと考えられる。そして、松平喜徳の出陣にあわせて構築されたと考えられることから、要砦の構築が松平喜徳の初陣を祝い、喜徳とその在陣地である福良の防御を目的としたと想定することも可能である。

第2節で述べたように、国内の「稜堡式築城」を、その実用性のみでなく、政治的・象徴的な意味において重視する意見がある^(註33)。幕末期の台場のみでなく、北海道函館市四稜郭も、近接する東照宮を守備するという、象徴的な意味合いが強いとされる^(註34)。このような視点から評価すれば、馬入峠の稜堡式防塁も、将軍家の血を引く若き藩主の初陣を飾る、象徴的な施設として構築された可能性が想定される。

これまで、馬入峠の要砦の築造年代について、慶長5（1600）年とする説と、戊辰戦争時とする説の二つがあり、議論が交わされてきた^(註35)が、本稿は縄張研究と文献史料の双方から検討し、戊辰戦争時のものとの結論に至った。対象とした史料のすべてを一次史料とみなすことはできないが、複数の史料で追認できる事蹟が多い。そもそも慶長5年説は現代の研究者による創作であり、実証的根拠が存在しないとの批判もある^(註36)。また、江戸時代に編纂されたと考えられる『会津要害録』や『会津古墨記』に、馬入峠に関する記述がみられない^(註37)ことも、江戸時代には遺構が存在していなかった可能性を示唆するものである。

東日本における、稜堡式城郭としては、長野県佐久市に所在する龍岡城跡が知られるが、峠に構築された稜堡式要砦は、現在のところ馬入峠の陣地遺構が唯一の例である。この特異な施設は、会津藩と将軍家との親密な関係や旧幕府脱走兵の支援などといった、戊辰戦争時の会津藩の状況を如実に示す遺構として注目されよう。

この遺構に関する今後の課題としては、正確な構築時期も含めた会津藩内での構築決定に至る経緯と、旧幕府工兵と会津藩土工兵との関係の解明があげられる。

さて、埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲については、「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化について」（平成10年 庁保録75号 文化庁次長通知一別添資料）に標準的な取扱範囲が示されており、①おおむね中世までに属する遺跡は原則として対象とする、②近世に属する遺跡は地域において必要なものを対象とすることができる、③近現代の遺跡については地域において特に重要なものを対象とすることができる、とされている。本稿で述べた戊辰戦争期の砲台場や陣地跡は、上記の③の範疇に属すると考えられる。現在の福島県域は、日本が近代化し始める動乱期に、新旧勢力がしのぎを削った主戦場の一つとなったことから、激戦地跡として著名な母成土塁跡、硯石砲台場跡等、一部が周知の遺跡として登録されている。

しかし、現地表面に明確な痕跡が残りにくい、知られざる砲台場や陣地跡の大半は、積極的に保護されているとは言い難い。大規模な製鉄遺跡群の調査に伴って偶然発見された事例や、当初は中世城館跡とされていたが、調査の結果、戊辰戦争期の陣地跡として再認識された事例等はある。しかし、当初から戊辰戦争期の遺跡として取り扱われた調査例は、皆無に等しい。

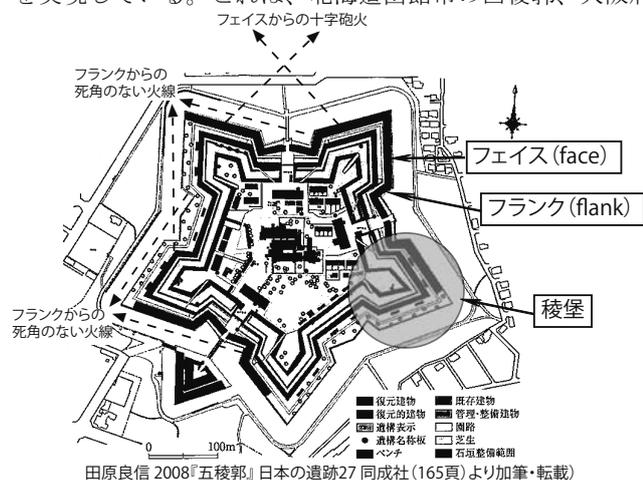
また、幕末期の絵図や古文書の検討から存在したことが明らかな場合でも、現在は大半が宅

地化、農地化し、消滅してしまった事例もある。今後、このような遺跡を保護するためには、地元自治体等を中心に現状記録調査を行うとともに、見学会等の機会を創出する等、地域の歴史遺産として認識される路を模索するべきではないかと考える。

〔謝辞〕本稿を草するにあたり、安齋勇雄様には資料の掲載を快諾していただきました。金田榮様には現地調査のご協力、根本容作様と遠藤嘉一様には参考文献をご提供、栗原祐人様には掲載資料に関するご助言をいただきました。文末ながら、ここにお名前を記して感謝の意を表したいと思います。

<註>

- (註1) 標題に掲げる「要砦」の表記は、後述する同時代史料の記述に基づくものである。
 広長秀典 2017 「馬入峠の稜堡式関門型防塁とその背景」平成29年度福島県文化財センター白河館文化財講演会『戊辰戦争期の陣地遺構』発表資料
- (註2) 石田明夫 2007 「国境に造られた攻守の遺構—戦国と戊辰の陣、防塁、塹壕跡—」『会津若松市史研究』第9号
 小暮伸之 2009 「戊辰戦争期の砲台場等に関する資料」『福島考古』第50号記念号
 小暮伸之 2011 「戊辰戦争期の砲台場等に関する資料(2)」『福島考古』第53号
- (註3) 小暮伸之 2017 「戊辰戦争期の陣地跡と史料」平成29年度福島県文化財センター白河館文化財講演会『戊辰戦争期の陣地遺構』発表資料
- (註4) 福島県教育委員会 1996 「福島県文化財調査報告書第321-1集・福島県遺跡地図・中通り地方」「福島県文化財調査報告書第321-2集・福島県遺跡地図・会津地方」に記載された正式な遺跡名は、「馬入峠堡塁跡」「母成土塁跡」となっている。
- (註5) 高橋信武 2017 『西南戦争の考古学的研究』吉川弘文館
- (註6) 中世城郭研究会 2017 『第34回全国城郭研究者セミナー・シンポジウム「幕末の城」』
 山本浩之 「稜堡式城郭の簡単な用語集」
 藤井尚夫 「稜堡式築城技術の輸入と実態（野戦戦術の改革・使える技術は何だったのか）」
 中西裕樹 「城館研究と台場への視点—楠葉・梶原台場と大坂湾岸の台場から—」
 高橋信武 「1877年の戦争における野戦築城」
- (註7) 菅田 宏 1990「第四編 第三章 第一節 久松松平氏の入部と藩政 三 湯本三か村と会津廻米道路」「第四編 第三章 第四節 戊辰戦争と村々 三 戊辰戦争と天栄村」『天栄村史 第1巻 通史編』
- (註8) 西洋の稜堡式築城技術の中に、内柵形の城門という日本式築城技術を組み込んだとも評価できる。築城者は、両者の利点を融合させたプランを実現している。これは、北海道函館市の四稜郭、大阪府高槻市の梶原台場（国土地理院のホームページ上の「古地図コレクション」の中に「神内砲台図」として、公開されている）とも共通する特徴である。
- (註9) 本稿における西洋の稜堡式城郭の各部名称及び機能については、（註1：広長報告9頁(10)、註6：藤井報告117頁）に掲載された挿図に準拠する（右図参照）。
- (註10) 陣地遺構の全長、土塁の法面の平均斜度、平均則長は、天栄村 1986 「第3編 中世 馬入峠堡塁跡」『天栄村史 第2巻 資料編I』（109頁）に記述が



ある。遺構の高さ、堀底の幅は、遺構写真に写った人物との比較から類推した。

- (註 11) 図 3 左下の「母成峠の戦い要図」は、猪苗代町 1982 「第 19 節 戊辰戦争母成峠の戦い」『猪苗代町史 歴史編』に掲載されたものを転載した。
- (註 12) 本宮町史編纂委員会 1998 「一 閑窓私記二」『本宮町史資料双書 第 2 集 本宮地方(二本松藩)の戊辰戦争』には、「(三月)会津にてハ専ら防戦之用意頻なり、中山口もひはら(桧原)越も通行止候由、石筵の上堺之ボナリ(母成)峠江大造なる土手を築き候よし」と記されている。
- (註 13) 栗原祐斗氏の教示による。
- (註 14) 本宮町史編纂委員会 1998 「三 西軍の戦陣記録 1 鎮将府日誌 (17) 大垣藩届書二通」『本宮町史資料双書 第 2 集 本宮地方(二本松藩)の戊辰戦争』には、「干_レ時長藩并弊藩二小隊ヲ分隊シテ勢至堂口ヲ固ム、無程敗兵間道ヨリ来襲苦戦ニ及ビ、薩・土ノ応援ヲ得テ終ニ討散ス」と記されている。
- (註 15) 天栄村 1986 「第 3 編 中世 馬入峠堡壘跡」『天栄村史 第 2 卷 資料編 I』
西股総生 2006 「戦国の長城 上杉氏が築いた本土防衛ライン 馬入峠の壘」『戦国の堅城 II』学研
石田明夫 2015 「馬入峠防壘」『会津の城』会津古城研究会
- (註 16) 広長秀典 2010 「遺構紹介…馬入峠の防壘について」『安子島城を復元する』郡山地方史研究会発表資料
- (註 17) 馬部隆弘 2007 「京都守護職会津藩の京都防衛構想と楠葉台場」『ヒストリア』第 206 号 大阪歴史学会
馬部隆弘 2008 「京都守護職会津藩の京都防衛構想とその実現過程—河内国交野郡楠葉村における台場修築の事例から—」『城館史料学』第 6 号
中西裕樹 2008 「梶原台場の復元と幕末の築城—楠葉台場との比較を通じて—」『城館史料学』第 6 号
馬部隆弘は、会津藩の建白には、次の 3 点の目論見があったと述べている。すなわち、①台場普請という攘夷対策を口実に掲げることによって、尊王攘夷派対策に反対する朝廷内の意見を抑えること、②台場普請を実現することで朝廷に対する政治的アピールをすること、③西洋式の築城術を京街道上に体现することによって、朝廷を守るのは京都守護職であり、ひいては幕府であるという政治的アピールを広く一般に向けて行うことである。
- (註 18) 馬部隆弘(2008)によると、広瀬元恭は「文政 4 年(1821)甲斐に生まれ、江戸の坪井信道のもとで蘭方医学を修めた。その後、京都に出て時習堂を開塾し、蘭学を講じ、診療にも当たっている。藤堂家家来の肩書きがあるように、彼の業績は高く評価され、在京のままという条件で、津藩に 20 石で仕官している。彼は、医業のかたわら多くの訳書を著しているが、その中で注目されるのは、安政 6 年(1859)初版のベクマン著書を訳した『築城新法』である。西洋流築城術書の翻訳は隆盛期で、同年には伊藤慎蔵訳・ケルキウエィキ著『築城全書』が、万延元年(1860)には大島圭介訳・ペル著『築城典刑』が刊行されている。当時一流の西洋軍学者としての側面が評価されたとと言える」と解説している。また、会津藩からは「軍事奉行を勤め、長沼流兵術にも通じる野村左兵衛が地形攻守の利害見込み御用惣括を勤め、同じく長沼流に通じる松坂三内が野村左兵衛の補佐を務めた。さらに、江川流西洋砲術を修めた中沢帯刀が、工事経営を務めることとなった。」とあり、「会津藩は楠葉台場を立案しただけではなく、担当者を当てて築造の過程にも深く関わることになる。しかし、会津藩士は京都に来たばかりで、周辺の地理にはさほど明るくなかった。そこで、広瀬元恭という、京都・大阪に詳しい者の現地登用に至ったのであろう。」と述べている。
- (註 19) 枚方市教育委員会・財団法人枚方市文化財研究調査会 2010 『楠葉台場跡』
- (註 20) (慶長 5 年)七月廿二日付大国実頼宛直江兼続書状写『覚上公御書集』卷十九
(慶長 5 年)七月廿八日付塩谷伯耆他宛上杉景勝書状写『秋田藩家蔵文書三〇「塩谷右膳家蔵文書」』
(慶長 5 年)九月七日付塩谷伯耆他宛上杉景勝書状写『「井上昇三氏所蔵文書」新潟県史三八五八』
- (註 21) (註 2) 石田論文など
- (註 22) 松岡進 1991 「畑谷城跡(山形県山辺町)について」『中世城郭研究』第 5 号
- (註 23) 最上氏が上杉氏の侵攻に備え慶長 5 年に構築したとするのが一般的であるが、奥羽仕置もしくは上杉氏の会津入部時、あるいは落城後における上杉氏による再構築などの可能性も否定できない。

- (註 24) 松岡進氏が慶長年間に比定した山内膳正宛最上義光書状にみえる「道々ニ無油断堀をほらせ、又さくぬきなともきらせ、かたはら二つませをき然るへく候」とした施設は、鶴ヶ渚城跡や畑谷城跡でみた土塁や堀に柵列が付属する施設に比定される。前述したように、松岡氏はこうした遺構群を「関所的な形態」と考えている。
- (註 25) 菊地明編 1998 『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社
- (註 26) 勝安芳 1889 「陸軍編制 上」『陸軍歴史』巻二十七(勝部真長他編 1977 『勝海舟全集』17収録) 函館市史編纂室 1978 『函館市史 別巻(亀田市編)』
 なお、『陸軍歴史』および後述する『会津戊辰戦史』では「吉沢勇次郎」と記載されている。
- (註 27) 会津戊辰戦史編纂会 1932 『会津戊辰戦史』 2003 (復刻版)
- (註 28) 註 27 322 頁。なお、同書中に会津藩の「築城兵即ち土工兵は、江戸の鳶・石工・左官・土方等を以て組織したるもの」とある(P227)。この記述を信頼すれば、会津藩の土工兵は、江戸で編成されたことになる。そして、慶応4(1868)年4月に旧幕府脱走兵として江戸を達ち、大鳥・吉沢らと行動を共にする事が確認されている。ここで、会津藩土工兵と、吉沢が指揮する旧幕府工兵方との関係が問題となるが、現在のところ不明である。
- (註 29) 註 27 258 頁。
- (註 30) 天栄村史編纂委員会 『天栄村史 第一巻 通史編』
- (註 31) 永岡清治 1925 『旧夢会津白虎隊』(菊池明編 2001 『会津藩戊辰戦争日誌 上』収録)
- (註 32) 新人物往来社編 1993 「島田魁日記」『新選組史料集』
- (註 33) (註 6) 中西論文、(註 17) に同じ
- (註 34) 田原良信 2008 『日本の遺跡 27 五稜郭』同成社
- (註 35) 中世城郭研究会 2010 「第26回全国城郭研究者セミナーの報告 シンポジウム大名系城郭を問う」『中世城郭研究』第24号。同様の議論が、2017年の同セミナー第34回大会でもなされた。
- (註 36) 本間宏 2011 「慶長五年「白河決戦」論の誤謬」『福島史学研究』第八十九号
- (註 37) 『会津要害録』の「福良ノ壘」・『会津古壘記』の「福良村鶴山壘」は福良字東山の新城跡、『会津古壘記』の「同(福良)村亀山壘」は福良字高橋の亀山塞館跡に比定される。よって、これらが馬入峠の遺構を示すものではないことが理解される。

(広長秀典：郡山地方史研究会) (小暮伸之・佐藤 啓：福島県文化財センター白河館 専門学芸員)



① 図2のa(北東から)



② 図2のb(南西から)

写真1 馬入峠壘跡(1)



③ 図2のdより県道235号を望む(西から)



④ 図2のb(北西から)



⑤ 図2のc(北西から)



⑥ 図2のf・南西突出部端(南から)



⑦ 図2のf(北東から)



⑧ 会津藩馬入口留番所跡

写真2 馬入峠堡壘跡(2)